

自由連合

Libera Federacio

6月20日

Vol. 29

自由連合社

姫路市川崎山354何所

振替口座

大阪1264

自由連合社

定価 1部 ¥30

アンケートは、義務、やあ
ません。手紙、原稿、その
代わり、まことのくういは
、という程度、ものの、気象
に書いてくれば、あ、早
くも、シコシコ、あ、早
くも、シコシコ、あ、早



今日における共同体

自連11号は、69年11月以降の沈滞状況を打ち破るものとして、今日における共同体の意味を提起した。そしてその後、共同体という言葉は、政治闘争主義に対する反動として、多くの人々の関心を引き、語られるようになってきた。だがその一般化は、共同体という概念・意味のさまざまな理解の仕方、それにもまして内容のあいまいさによって、一種のはやり言葉として、共同体志向の人たちを生み出したにすぎなかった。その多くは、現実からの逃避——ヒッピー化、農業的原始共同生活志向など——政治的社会的矛盾との鋭角的対峙をさける負け犬のていのよい隠れ家となっている。ひいてはマイホーム主義の変形でしかない私欲的私生活の合理化に使われるお題目と化してしまっている。

「号に於ける」共同体の提起は、実は「共同体の意味」でなく、表面的「意義」を語ったにすぎない。そして今更には、共同体の「意味」を自ら明らかにしない限り、たやすく「共同体」を語りえない政治家に立っていると言うべきだろう。

なまけ・あせり・居直り

(引用1) サテン、マジシャン、若干の体制批判……。それのどこが、あかんねん。石投げても裸で街を歩いて、体制はそれをも包み込んでしまっている。みんなが葉のんで、うりうりたる一番ええんや。

(引用2) 何をやるのか、やりにくいのか、判らない。集会やデモに行っても面白くない。でも4、5、やっぱり、公園へ。ヘルメット部隊が前の方に陣どって、デモに臨む。その後ろで関係ないという顔でマンガを読んでいるヤツ

魚食化した課題を、次から次へと渡り歩きながらウロウロするという醜態。これで行ったと言えろのだから。自分などどこに据えて体制に切り込もうとするのか。その向いを振り下げるためにこそ、ぼくは三里塚へ行っただけだ。だが自分の即いの場を見失っている者が、ノコノコ出かけて、何になるのか……。

(引用4) 俺、10、21以来デモにも出ず、集会もさぼりがち。ニーチエにいかれて二ヒリ、三里塚の請に動揺し、京浜安保のニュースで「カタレリ」と騒いどり。そのくせ彼とサテンに行くと、いっばしのアツブって「デガス。友人と」今は冬だからだ。なんて話して、冬に冬も春もねえべ。

これらの共通点は——
①「政治」へ政治的なものへの不信と反感。
②自己喪失感。過去志向。
③日常身辺のことに對して傍觀的——というより、自分との関りが視えなくなっている。(それは「敵」を見失っていることでもある)
④何かしなげれば、という行動の対象と方法を見出せないこと、それに輪をかけている。
⑤あるいは居直り。

関係からの逃避

しかしながら、スウェーデン日ともなれば、ふっきれぬ気分を引きずって集会へと向う。免罪符を求めてでもない。「やむにやまれぬ気持ち」その心情的であったことである。しかし、それらスウェーデン日同争は巨視的は政治日常の中に組み込まれたものでしかなく、「やむにやまれぬ」心情だけで自分の日常を突き刺す何かを得ることはできない。再び自分の閉じた殻の中に帰って来る。

つながることなく完結してしまっている。そして、ごくうまいな情念なるものを不完全燃焼させながら、内へ内へと籠って行くだけである。69年11月同争のあと、政治的組織に徹底的な不信感を抱いたばかりはそこで改めて自分自身を問題にし始めた。言わば個人への回帰である。それは当然のなり行きであり、一応正しい方向であつた。

しかし、その個人への回帰はその後そうあつてはならない方向へと進んでいった。つまり、自分の内部に自分を閉塞し、極端に政治的社会的な外部との関係を遮断することによって確かめようとしている。

だが、その裏返しもある。関係からの逃避は、社会的な生活の現場からの逃亡とまで、あるいはそのことへの願望として現れることも多い。

(引用5) まず旅立とう。まつりを求め、多くの街を通り抜けて行く。自由に行きよう。ストイックな革命家の招来する社会は不自由に違いない。

五月のワシントン。ロックフェスに集った若者。権力は全盤を授け。留置しきれず後援場へ。だが金網の中はウッドストック・ゲネレイションの世界。今やアメリカでは、完全にロックアウトした30万のヒッピーと、それに同調する30万のフリークが、もう一つの世界を創り上げてしまった。これは社会革命の現在進行形なのだ。

まじめ人間は、まず口ツブ。行ってみる。見知らぬ土地の口ツブフェス目指して旅へ。日本人にも芭蕉や山頭火の放浪の血は流れている。旅立て。すべてはそれからだ。

なぜこの手紙の主はアメリカを語るのか。それは少くともぼくらの同

【前頁より】 固の現実ではない。それにもまして、自分が旅立っていない現実。どう旅立つか、どこから旅立つか、が抜け落ちていて、この旅立ちとは、いつまでも憧れのままに終るだろう。

ここに何より必要な視点は、オニには、旅立ちとうと呼びかけながら、旅立ちの「観客」となってしまうという自分の抽象的な行動意志を、具体的な現実行動に転化するために不可欠な思考経験となる「日常」をどのように把握するか、である。

野合とユートピア

その意味で自通し号は、再び運動を日常の中で組み立てていく具体的方向として、共同体を挙げたのであった。しかし、その内実を問わない共同体は、たゞ集団をなしているだけである。それは、閉鎖的に孤立したばかりが自分一人で完結させている心情的回路を、そのメンタル総体での共通回路へと拡張しただけのものである。そこには、共同体を支えるべき個々の「われ」なんじの生産関係はなく、いたずらに肌をすり寄せて空しさをかこち合う野合関係のみがある。そのようなものから、自己の沈滞を打破する何ものをも生み出しえないことは明らかである。

(引用6) 都会に自分の場を見出せない者、一人でいることがさびしくていられない者……このように故郷を失った者たちが、誰でも自由に来られ、勝手に使える土地、私有以前の自然のものとしての土地を得たいと思っています。そこは個人が背負っている社会のせいで自ら脱ぎ捨て、差別する者される者が、一つ屋根の下で一つの釜の飯を食うなど、同じ生活をする中で、被差別者の痛みも共に生活する所です。このような自然村を農村の真只中に作り出すこと、失われた故郷を日本中に作っていくことを考えています。

ここに現れている「共同体」は「旅」と同質の、現実からの逃亡であり、「共同体」を無条件でユートピアと重ね合わせた心情的な「あこがれ」としてはにすぎない。実際に現れる「原始的共同体」のつらさを「共同体こそ未来社会の先取りだ」という「夢」で力押ししてしまう。ぼくらは今、日常——「体制内

市民社会」を基盤として立っている。その否応なしのものと「自己の志向」としての「共同体」との関係、その「口をス」を追求するものとしての「自己」と行動の意味・内容を明らかにしななければならぬ。そうでない限り、いよいよ頽廃を深める沈滞を集団で解消したと思いついてるだけである。その頽廃ぶりは今よりも重症だとさえ言えるかも知れない。

逃避ではなく

今までに挙げた引例に共通するものは、「政治的日常生活」から「ロックスアウト」という形において、実は社会的現実的日常生活から逃避していることである。真の「反政治」的行動が、実は「政治的行動」たるざるをえないように、ぼくらの日常が政治状況の中にある限り、「反政治的日常生活」もまた政治的日常生活たるざるをえない。言い換えるれば、政治的社会、政治的日常生活からの「ロックスアウト」はそれそのものとして政治的行動であり、固い放棄することでは実現しえない。

それゆえ、ふたたび次のような批判が生れてくるのもまた当然である。

(引用7) 「状況としての自由連合」をどのように創り出そうというのか、まるで私には伝わってこない。それは趣味的な「ロックスアウト」の寄り合い、実体的な生産関係内にある出ない学生やアルバイト志向の「出」し者の「ユートピア」志向の「出」し者。今必要なのは、情念内部で絶望的・養育的、自らの反権力意識に浸り込むことではない。ユートピアを語ることで自分自身、どこで自分自身を創り出し、政治社会空間を占拠し、それが問題なのである。

われわれは、生産工場内で、流通組織内で、教育秩序の中で、生存を主張し、実体的な反権力空間を創出し、あらゆる機構を服用していかねばならない。

だが、この問題とは、この論理を具体化しようとする、かつての政治闘争の繰り返しとなることにある。さもない限り「実体的」と言いながら、具体的方法をもちえないことにある。これでは「生産空間」の反権力空間占拠も、「共同体」や「ユートピア」と同じく「念仏」に終わってしまう。

反政治日常として

さて、以上の引例から引き出されてきたものを要約すると、あきらかに政治的日常生活の拒否。「政治的日常生活」の拒否。

の否定として出てきた観念としての「非政治的日常生活」それと結びついた「共同体志向」。

② だが観念としての「非政治的日常生活」は、そのまま「政治的日常生活」体制内にとりこまれていく。従って真の「社会的・生活的日常生活」は存在しない。そこで「共同体志向」は、「日常」「現実」からの逃亡とならざるをえない。

③ つまり、政治的日常生活からの逃亡は観念の中でしか存在しない。そこで、共同体が根なし草空間で作られることへの批判——生活日常の欠如の指摘と生産空間での反権力空間占拠の反提議がなされる。しかしそれはふたたび「政治的日常生活」への回帰でしかない。

とすれば、非政治空間として想定される共同体が、政治的日常生活からの逃亡としてでなく、反政治的であるゆえにきわめて政治闘争的力たりうる意味と内容をもつものとして創り出されることこそ、ぼくらの追求するものだと考えるだろう。

だが、そのような共同体とは、具体的にはどのようなものなのか——と言う時、ぼくらはそこで立ち止まらざるをえない。

言うならば、それは初めて創り出す全く新しい未来社会の概念であり、「共同体」を既に在るものとして捉えてきた今までの「共同体志向」を「否定的媒介」として創り出さねばならないものである。こう言う以外、ほとんど力オスの中に隠れている。そして今わづかにわかつていることは、その追求が自己周辺の政治的・社会的日常の現実と密着して、日々の生活そのものの内から具現すべきもの、と言ふことである。《未完》

補記

政治的スリヂェール闘争がある時、ぼくらはどうするのか。それが明らかに無意味で、ぼくらは他に何をすべきことをしているなら、当然無視して良い。だが、ただそれをせう笑って寝そべっているのなら、ぼくらはそこへ出るべきであろう。

なぜなら、ぼくらは締め取られていた政治的日常生活において「無視」も「関係」もある。決して無関係なのではない。しかもそのことに気づかぬことこそ、逃避の道だ。

とするならば、デモに対する視点は、今までの異り、どのようなデモに参加するか、新しい課題となる。すなわち、デモにおける自己の存在の発見であり、その確認として、自己の他者ヘデモに対する役割——関係の設定として創り出される自己の積極的意味である。言い換えるれば「否定的媒介」として【女下段へ】

教育に於ける差別

身体障害者の争奪と差別

「争奪としての差別」

「身体障害者」は個別的な人間で、
相対されている争奪である。私は
資本主義社会という階級社会の青年
と対峙した時に、その争奪に出合
った。見えない差別の存在に、
叫び起すにこれに異和感。「差別し
てはいけぬ」人だぞ」という意識。
相手の苦悶への共感。手をふり、
首をふり、口をゆがめて、しほり
出すように語る彼の話を聞いたあ
とは、異和感から生ずる距離感
が、なにより消えているように感じ
た。私は初めて一人の個性障害者
を人格として知ったのである。頭
さばり差別しないつもりでいたが、
争奪として身についている差別に
気づいて取すなしい。

荒木君と共に裁判闘争を闘って
いる横山君は、異和感をのり
こえている。荒木君に近づくこと
によって、社会的差別の争奪をよ
く見ることもできているようだ。
その位置から教育を考える必要が
あると私は考えた。

「彼を切り捨てるもの」

横山君は「身体障害者は社会的
につくられていく」と言う。身体
的条件が異なるだけでは障害者
にはならない。彼を切り捨てる社会
的条件に出会った時、「障害性」
が現れるのである。

三行を切れてくる電話。細い
線から貨車を入れねばならぬ自
動搬送機、階段の昇降を強制する
歩道橋。そこには資本の論理が貫
徹している。その中で「役に立
ぬ者」「厄介な者」として切り捨
てられることになって障害者はつ
くられるのである。

荒木君の場合、自動搬送機は彼
の障害性を減らすものであった。
しかし「運転免許」は、彼を障害
者としてあしこめるものである。
そして、学校教育をそのようにな
らしてあるのだ。

盲人に大学入学の門を開かざる
ために運動している「卓友会」の
宮崎君の報告の中にその争奪が
見え隠れしていた。天才で小学三年

生になった個性障害者の八木下君の場
合にも、明らかになる問題がある。
荒木君に生活保護を、と考える人
たちもいる。しかし、それは彼を「
働けない人間」と想定し、切り捨て
ようとするもの、「コロニー」の思
想である。

宮崎君は、大学入学の意味を問う
ことなしに「盲人に入学の機会を」
という運動に疑問を感じると言う。
現在の能門主義の選別機構の中で「
盲人でも能力の高い人には上にのぼ
る機会を」ということは、差別・
抑圧をこえることはできないだろう。

身体障害者という争奪をつきつづ
けることで、この人を切り捨てるの
を包み込むのは、社会のための教育な
ら、と問う。問うても答えぬ者を
告発しよう。同時に「切り捨てる包
み込む教育」、一人一人の学習主体
に合わせた教育を創造していかなば
ならない。われわれのシンポジウム
をそういう学習の場にしたい。

「身体障害者こそ教育者」

今回の「身体障害者こそ教育者」は
シンポジウム「闘争と学習」(ヤマト回)を企画し
た横山君はこう言っている。

「身体障害者は心が豊かである。
普通人にとつては何でかないことを
意識化する。そこに心の豊かさが生
まれる。二〇年の間、一つの争いを考
えつづけてくれば、何かな判ります
よ。」「争い、彼は健全な体を持った
者の多くに欠けている豊かな心をも
っている。

「身体障害者こそ教育者である。
私は軽度の障害者なので、黙ってい
れば相手も普通に反応している。し
かし、自分足が悪い」というと、
途端に相手は意識して態度が変わる。
そういう人たちに、自分な一人の人
格であるという争いをぶつけていき
たい。身体障害者は衝動を与えること
によって相手の人格に影響を与える。
このことも私にとって争いである。
私は荒木君、横山君、八木下君など
大切なことを教えられたと感づいて
いる。

「争奪としての社会」

私な目を開かれる思いをしたそう
一つの経験を書き記してあこう。

昨年の夏、横浜で一人の母親が
個性障害の二才の子供を絞め殺した。
この母親には、もう一人四才になる
個性障害の子がいる。事件は、市の

「二才も医療センター」入院を議員
のため断られた直後であった。
これに同席した地元町内会の人た
ちが「派閥闘争運動」を始めた。身
障者の父兄たちも、政府の対策の
困を吐露してこの運動に同調した。
これに対し、個性障害者協会「青い
芝」神奈川県支部では派閥反対の署
名運動を始めた。

私は「殺される我々の身にもなっ
てみろ」という二人の人の気持に
は感心しながらも、「その母親も気の
毒だ。派閥反対などとは酷い」とい
う気持ちを禁じえなかった。その後
重傷者とその教育に力を用いた
障害者の文章を読んで、私の頭は「
健全者」中心の歪みを感じていてこ
とを知った。

彼は、この母親の弱肉強食社会に
埋没した人生観、町内会の人たちの
経済優先・利権追求の価値観を鋭く
指摘している。それに続く彼の言葉
を最後に引用したい。

「この母親を精神的にここまで追い
込んだのは、この町内会の人たちに
責任がある。障害の子供を異端視せ
ず、母親を助けようとしたならこの
事件は起こらずに済んだであらう。
この婦人部としてやらねばならぬ
のは派閥闘争運動などではない。当
面は母親を助けて、立ちあがるま
での間、残された障害児の養育を保
証する運動である。そして、長期的
には、どんな重症児でも町内会の子は
婦人部の手で育ててゆける社会を作
り出す運動である。障害児を殺した
母親の派閥闘争運動は、生命を
産み出す母親の生命を守り育てるこ
とを望みます。」「この叫びは出てこ
ないと思うのである。

「夜学通信」より 西村 秀夫
山梨県都田郡区駒場東大教育学校
進学相談室 西村秀夫

「前頁より」デモをどのように自己の
ものとするか。例えば隊列外でピラ
ミッドを組んだり、旗の掲揚、作り方、
歩き方、歩き方、隊列との関係のつ
くり方である。或いはデモコース
のどこにどのようにつくられるか、
地図の作成や戦術提示などの主体的
参加である。
政治闘争がどのような生活日常
元の生活技術と事務レベルの、
わけても些少の部分から組みあが
新しい視座で見直されること、新
しい共同体の論理は深く結びついて
いる。そしてそれは、共同体が共同
性のある農業経営や共同生活に結び
くイメーヂを一度捨ててみれば、
と、生活身辺の徹底的な状況の把握
によって政治的日常生活とをどう
あし、つくり出すことと無縁ではな
い。文責 杉原 賢一

權力命令也勿性之裁之

木山裁判へαアろ口ー子

木枕山車什とる

昨年四月廿日、画家の森山安英氏が還浦された。伝習館高校三教師廻行反対のデモ印である。権門の弾圧に対するエロスを表現した彼のムシ口旗を「公然ワイセリ」 画公然陳列したといふのである。彼の受けた取調やなら、権門は次の五點を知りたなっていることなりなる。

- ①各地の先達の画家の動向と連絡
- ②芸術家の街頭行動と市民運動の思想的関連
- ③伝習館三教師を支援する高校生
- ④OBとのつながり。
- ⑤反門博などの街頭行動の内容と参加者に與する情報
- ⑥マリウナなどの使用の有無

この後、森山氏は「逮捕・罰金
は不当であり、刑法一七四条ある
び一七五条へ公然わいせつ罪」は
憲法違反である」として本訴を起
こした。

裁判準備員合趣

この裁判には反権力闘争と芸術裁判とは区別はさうなくなつてゐる。いろいろな立場を含みながら、性表現の解放は正当であり、これを弾圧する刑法一七五条は憲法であつて逮捕は不当である。といふ旨に一致点を確認しながら運動を共有する。

作り切りミスによる空白二行

当事者の思想表現を論理化する
 法廷の個教化も考えられるが、反
 権門闘争の思想的立場を離れては、
 弾圧を告発し、表現の自由をなす
 とすることはできない。従つて、思
 想表現における権門闘争として、
 市民をも巻き込みながら、各自は
 自行自身の問題として、あらゆる
 角度から闘つていく。

北九州府戸畑区千町2-4-9
 弘森山行 森山裁判準備委員会
 (福岡・大牟田・柳川にも種結
 串務局があります)

エロティシズムの正当性

「与えられた自由」のもとに、日本の芸術が世界水準に達した、とシヤ―ナリヌは伝えている。

しなく、与えられた範囲内での表現行為は、「進歩と調和」の体制内に組み込まれていく。ある批評家は「これだけ機会を与えられて、なお細心の目から窺はる作家はどうしようもない」ときで言う。

こゝした支配に対応する啓蒙の一
つは「作らない」ことだった。しか
し、その強烈な觀念を、任意的な情
報氾濫による精神の空面化からは逃
げられやうでない。

私にとって必要なのは、新しい
方法論をこころにすることがあった。創造
への欲求を反権力の国策地点に投げ
込み、工口子シテムの正当性を主張
することで、権力自身のワイセツ性
を告発しつつけることである。私に
は、伝習館問題な工口スミビタマチ
ツクな場として抱えられたのである。
甚固にあふれる衛生無害な工口は、
私とは無縁である。

三三の御指をなげて

僕は先日、オートバイをひっくり返って大怪我をした。舗装道路が急にされていて、穴の中へつっこんでしまったのだ。入院中シヤクにさわり、告訴も考えたが面倒だからやめた。どうしても僕の工口を動かしてくれなかったのだ。

どんな大革命や反体制運動でも、
 自行の内なる工口とな動なぬことに
 はどうにもならぬ。逆に、何の工口
 ともなしに、義務感や同情で革命を
 唱えるのみは民衆であらう。ところが
 新左翼にも、工口を待てぬ連中は
 意外に多い。新左翼こそ工口を中心
 の思想と解したのには、僅の思いらな
 いったらめだろうな。

自己の工口又に思案を求めば、他人の工口又を認めるべきだ。一人一人の工口又のべき殺な大きなうねりとなる時、世の印はあらずと変革の始動を始める。

老人が衰弱の入口ををせしむ日展
や美術館を崩壊しようとは思わない。
NAG（ニーアートタル）は、
老人の行々ともたさには仰々しく話し
合あつと、出すぎた親孝行のために
美術館に顔を出しただけなのだ。そ
れなのに、追い出されてしまった。

その表現は否

無論「自立」に關しては多くの方法がある。種々の角度から同じを展開せねければ、我々の手に「自由」を奪還することはできないだろう。私な性表現を選取するのは、性の問題な、人間の、変革の根本的エネルギーを持つからである。私たちが獲得すべき思想と愛の根本的な方向を指し示しているからである。

「性の解散」とは、支配・被支配の關係を根柢ならくつなえす生命の論理を核に含んでいる。あらゆる人間の「自由」を要求する「危険思想」なのである。

この事件の根は深い。週刊紙好みの「ワイロツな芸術家」といつに論議なら、思想表現の領域へと問題を逸れていかなおはならない。芸術上の問題というだけではすまないものである。昨今、各地で開催されているロックフェースティバルなどにも、必ずと言っていいほど機動隊が介入している。今こそ、我々は、どこを何を表現せねばならないかを本気で考えてみる必要があるのではなからうか。

(木林山 安英)

だが、このことへの怒りだけでは僕は動かない。手三裁判に關すのは、ここにエロエを感じるからだ。そのエロエの根源は手三にある。何々を表現するといふ今までのいやらしい美術と違い、オマジエとしての魅力さえない手三な出品されたことに、新しい次元を具出したのだ。

なんでも認めてしまふ僕にとって
も、欠点をあげつらう評論家どもは
敵だ。彼らと同一地帯に立っている
人すべてそうだ。

我々の根柢の自由を圧殺するべき
 さまの魔手は、反体制側にもある。
 根柢をねじ曲げようとするとする矢取り専
 門のアジ評論家。徒党を組んでのし
 歩く何とな一家。そういう内部の顛
 こそ、人間の変遷をあくらせている
 張本人である。

そのいう連中に、我々は「ミ」の御
 腹をななげて仰いを眺む。この仰い
 に「ええ無表情な「ミ」に、僕等たさ
 らなく「工口」を感じる。人々がこれ
 を極端に忌み嫌うのを、ある種の「工
 口」に照射されてゐるならでゐよう。
 「「ミ」盆報」より 岩田 信一

生むための避妊

性をさめめつくることは、一休ごんなことなのだろう。21才の11の性をもち私にとって、男と「寝る」ことは、その男に「対話」を迫ることである。性欲求を持ち、性快楽を求めることも求めた上で、なあ「対話」と言いたい。

性にはやさしさのふつかり合いがあるはずだ。個体と個体、個体と個体とのふつかり合い。しかし男は自分の欲求さえ満たせば終りだと思えている。やさしさのふつかり合いを拒否するな、気づかない。

11にとって、男と「寝る」ことは大きな意味を持つてきた。「寝た」ことなら何かなと感じとり、影響を受ける。男はどうなのだろうな。

11解放は性解放に直面する。しかし、男たちの「11解放」に取組んでいるのなら、いう誰とでもいいだろうという声は、余りにもろいとはされである。

さて、男と11の性のいとなみには、11の妊娠という現実な待たねええている。私に11の「タル」は、避妊法のはんぷれし作成にとりなっている。

「避妊」なんて、神聖な性の冒瀆だれという人もある。しかし、私には11の何人でも生めるというけいたくは身行ではない。

中絶を避妊法と勘らないしている男ども。中絶台に乗るのは、いつだって11である。「寝る」ことに躊躇しなくなった11たちの無防備、男たちの工事、そして両者の無知。

避妊は暗闇でこさやられるものではない。男と11は存在する限り、自然の性のいとなみがあり、妊娠はあるのだなら。生まれてくる子供にとっても、その11ツクルの一番よい時期に生まれるのが幸せというものである。

私には、この11ツクルを生むためにめまなく、生むために作る。こつこつ大切なのは、新左翼の男どもの運動になることはなさそう。だから私には11どもは、心にラジカルさを秘めてやっている。コミュニケーションも、性・男と11ということを明確に思考しない限りつ

あんなの現在の状況

あんなの現在の状況

さうくだろう。一つのコミュニケーションに男と11は生活する限り、恋愛もあるだろう。その時、その11ツクルをもちめたコミュニケーション、その11ツクルへの性の保障がなされるコミュニケーションでない限り、それは単に若者の集りに過ぎない。また、そこには其有の財産として子供たちを育てられる空間の書き真が必要だ。

さて、ここを書き、やはり言葉のしりぞかしを感じてしまう。しかし、社会風物の一つに数えられしきつたウーマン・リブの潮が引き始めている中で、11たちはシヨシコ或いはウジウジと何かなをやってい

「あんなの」より 市川 泰子

11東京都練馬区石神井町1の6の10波寿美荘大反気付るなっさんす

亭主と寝る様になって、はや四ヶ月。「寝る」、この表現、露骨さやうで書くのに抵抗を感じ、変に、あんなを感じた。しかし、結婚、自身体儀式であり、共同生活、と言え

このさうになるまで時間を費した。なつたし、「結婚」とは……といううな論理を持ち得なかつたので、何やなやと悩むことはありである。

11暖の手紙——結婚する、子供を生むという二つは、世のあんなたちを、とにかく生き続けるという世界に閉じこめ、それを越え得る自分、自分の選んだ亭主の側面なしには獲得できない

家族といっしよの生活にあいて、家庭が崩れることを恐れ、自分なわいのあまきり、体制、リ、家々に適応しようとする。そついう生活をしている間に、何をしようとしてい

るのか、何をやりたいのかわからなくなり、無気力になつてしまふ。自分が亭主に「同化」してしまふのではないなという不安があれりとなつて、自分でもいやになる。

11暖を指摘するさうに、亭主にも責任はあるな、まず自分を分析してみればよい。協行とは何ものな、そつではなく、自分さどこまで映出し得るのか。体制の中さ。家の中さ。一人の主婦として、否、11として、何を乗りこえようとしている

のな。寝る、という行為の中で、あんなはどどこで、どこまで人間になり得るのな。

男が母親から教えられる、あんな、をどこで打破ることまでできるのな。亭主との間にあいて、「あんな」であるの。寝る、時だけである。行動する男、家事、負担をする11と行動した時、「あんな」は家への適応のためめまなく、家の中の一人の人間として、自分のため、どこまで生きることな可能なのさあろうな。

「11州通信」も、くすくす、いとう11福岡県中岡市自由ヶ丘5河野市九州活動者連合準備会」

現在「11」に生活し、話し、自分ないる現在の事柄を整理している「人」により、書かれた詩、詩を書かない人の持つてくる全てのものを同じく持つてくる詩人でもない「人」により、書かれた詩。そのさうな詩にこそ意味があるのさあろう。情緒のみをうたいあげるのではなく、その情緒を起ここしめた対象に對し、彼の目と頭を通して既成的でない彼自身の観念を持ち表現する。そこに詩の本質があるのさあろう。

本紙に収められている詩は、明白な思想に裏付けられた情緒が、その思想にも束縛されない「人」により、表現されている。

二〇号をもちて休刊された第三次「スモス」から、新しく第四次「スモス」第一号として発行されたもの。詩一七篇の他、評論三篇、同人の雑記が掲載されている。(中原さと子)

我々は人間の奥深さからの変革の論理の創造と行動のために、さきアノギズム文獻センター(仮称)を作りつつあります。

ぼくたちは、ミニコミの存在に注目し、またそれをより多くの仲間へと情報化していきたいと思います。

「文獻センター」より

11静岡県富士宮市杉田251龍方

編集室

これから編集室を作ろう。

どうでもええわ

やめた、世にたい

あーあ、つなれる

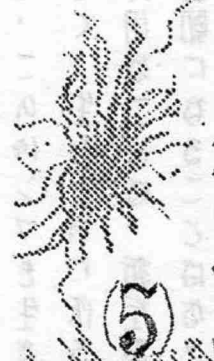
N K T S C M Y

義理と人情

瘋癲のソコ

行状記

下条がある



午前中に現場から一人が泊れた。

これで僕と一緒に来たアソコは半分の三人に減ってしまった。しかし誰もあわてずさわがず。はんばという世界では暗黙の了解であるかのようだ。管理者の番頭でさえ無表情である。そのことは新参の僕には奇異に映った。たゞ一人文句を言うのは若いおかみさんだった。「おかずをいくつ作ったらえんかわからへん」と。

アソコすることは日常茶飯事でしかない。あつて当然、なければ不思議というところか。僕も二日、三日と経っていく中で、アソコするアソコの方が人間味であるような気がしてきた。金がないからアソコできない——金のためにイヤなはんばにいななければならぬ——とは屈辱だろう。

自分自身の意志で現場(?)を選択できる自由を行使できるのはアソコぐらゐりしかないだろう。しかし、その自由は無保障と同意だ。

残った一人Nさんと親しくなった。その人は40過ぎ。正真正銘のやくざくすれだった。彼は常に兄貴分として僕を囲い込んできた。彼には何の悪意もないので、僕は彼に従った。風呂に行く、酒を飲みに行く等々、はんばから一歩でも外へ出る時、僕は彼の横にいた。彼と僕がこれほど近づいた理由は仕事着のない彼に、僕がサウ風のオホソを貸したからだ。彼の身に染ったやくざ世界の義理というものが、一本のオホソは大きな意味をもったようだ。

義理に厚い彼は、アソコに対して肯定的だった。

「アソコは10日契約で来たんや。約束は約束、守らなアカン。10日間働かせて、ちゃんと金もって帰ろっやないか。」約束は守るべしという彼の心情からすると、意地を守り抜くこと

の必要性を説いているのだろうか。意地を守ることはじめて義理が果たせるようだ。しかし、やとわれることに誠意で「たえろ」とは、片腕の調子で自分から足を踏み込むことではない。

「金のために働くんやったら、別にアソコしてもかまへんやないか。いくらでも他に仕事あるのじ」という僕の反論は、彼を眉直らせた。しばらく考えたのち「アソコはそんなイヤやな」と。

イヤであることも、幻想はすぐにつぶれていくのが世の常というものであろうか。

はんばに入って三日目、補欠のアソコが三人運ばれて来た。そしてその一人が、着いて二時間もせぬうちに盗を消してしまった。悪いことに、その直前Nさんがそのアソコと話しているのを、あのおかみさんが見ていたのだ。女のヒョウリは、推量を事実として語らせるのか、Nさんは逃亡補助の罪というぬれぎぬを着せられた。

Nさんは言い訳したかった。しかしその汚名挽回のため意地になつていたようだ。Nさんは落ち着かぬ一人のアソコと話をまじえていた。

その日ははんばの風呂が使えるので、そのアソコは風呂屋に行くと言ひ出す。

「アソコ配やからついて行くワ」

「やめときやめとき。アソコした

いんやったらさせときいな」結局、僕も金魚のソコのようにNさんの後について行くことになった。どうやら約束を守ることにあまけかつきそうだ。義理を果たすだけでは済まないのが人情というものか。

× × ×

知ってゐる風呂屋はあいにく「本日休業」。別の風呂屋へ行こうというそのアソコについて、風呂屋のノレをくぐる。そこで、そのアソコが一匹も持っていないことを知った。「アソコけどたてかえといへんか」いかにも大きな金を持っているかのような口ぶりに、Nさんは含み笑ひ。脚を脱ぎながら、Nさんは小声で「絶対に連れて帰る。いや、言うたらサンドルッたのかわりや。」

そのアソコは僕に対しては奇妙なほど親切だった。根ほり華ほり間いたあげく、「一日一万円の仕事を紹介してやろうか」などと。馬鹿らし

いが聞いている他なかった。

風呂をあかると、ハ―へでも行くうと言ひ出てきた。愛想をつかしたものの、僕は結局彼のあとを追った。

全も持たずにハ―に入るこの結果は、およそ知れたものだ。

「警察に行こう」と、そのアソコはやくざ三人がかりでどこかへ連れ去られた。Nさんは体でかたをつけでくれと言つ。若い者に手を出すなという彼の気持は、僕への義理であり、元やくざとしての意地である。

しかし同罪である僕が仲裁に入つたことは、用心棒を怒らせた。幸にもボディーに一発みまわれることでした。

この場を収めるには、僕が付け馬つきではんばに金を取りに帰るしかなかった。僕がそう申し出ると、Nさんへの暴行はようやくやんだ。

× × ×

翌朝、釈放されて戻ってきたNさんは、荷物をつきつけられた。彼の顔は一瞬くもった。彼の誠意が誠意として受け取られなかったことへの不満であることか、僕にはすぐわかった。しかし彼は、「お世話になりました」と一言述べるだけで意地を守り通した。

× × ×

彼がやくざから足を洗った理由はその非人間性にあった。もとを必ずとる、つまり二発以上殴られたら寝込みを襲つても三発以上殴り返さねばならぬという形態——陶芸主義——にあった。彼は気づくべきだった。義理は陶芸に勝ち残るための結束のためのものであり、人情はその負の部分埋める代償としてあることに。そして彼が大事にした「義理と人情」は利害が本質的に対立する関係にあり、人情は抹殺されざるを得ないことにも。

彼は生活手段として、やくざ道を選んだ。そして次にアソコを。彼は言っていた、「アソコはとよい商売は方い」と。この言葉が負けあしみてないとするれば、彼の言葉の重さに驚かぬべからない。

× × ×

彼は一文も持たず、早朝のあせ道を消えて行った。「若い、迷惑をかけた方」といふ言葉を残して。

(つづく)

☆前号、無断休載して申し分けありませんでした。

(71・6・15 読売)

——話によると、暴徒の先頭に三、四人の白手袋、ヘルメット姿の男がおり——警備本部は——反戦系、全共闘の過激派たちが計画的に労務者をあつたこの見方を強めている。

(朝 労働者)

おもろかったでエ。パチンコ屋の前のホルモン屋にぎょうさんにく積んだあるやろ、それ石のかわりに投げよるね。せやけどわしは見て、ただけやで。

(朝 労働者)

かなわんわ。二十四時間勤務に奮闘通して帰るとワイワイしてって、いっつも眠られへんのや。あほどもが——

警察が挑発したんや

情報資料<II>

—71年梅雨期釜ヶ崎—
寺島珠雄

6月11日現在起訴者数16名

{ 15名 大阪拘置所
1名 在宅起訴

一部の若のさわざにまきこまれず明るいまちをつくりましょう

(西成署書き置きポスター)

(全港湾面成分会代表関沢71・6・15)

——石を投げて釜ヶ崎が改善される。これは事実です。しかし誰も好きで石を投じているのではない。やる方ないフンマンがしぜん石を持てせる。

(新釜ヶ崎通信 0号)

——全港湾面成分会の一貫した主張である手配師進放は、スローガンとしてでなく、実務的対策を出す段階ではなかろうか。

たとえば、大手建設業者との交渉によつて、或る一現場の労働者解放を、取組法による認可事業として労働組合が、やつてみることは考えられないか

西成労働福祉センター労組「体質解体」／釜崎日雇労働者を喰い物にするな!!

反労偽若的集団は釜ヶ崎には必要ないのだ!!

(西成労働福祉センター
69年度事業報告 抄)

——この地域の日雇労働者の血と汗の結晶が社会に大きく貢献してきていることを、試算しておこう。毎日一万人が稼働し、一日平均の賃金が二千円とすると、一日で二千万円、二ヶ月六億円、二年で七十二億円になる。これを生み出した価値に直すとこの数倍になる。假らに對する社会的評価が正され、対策の強力な充実が主張されるゆえの一端である。

(夜中半の書店主婦)

うちは釜ヶ崎やないと思えますのよ、釜ヶ崎いうたら線路向うとちがいますの。あじやこばいん(こも釜ヶ崎ですの。……(ためいき))

(夜中半の商店主らしき男)

日本人同志でんが釜ヶ崎とかいい合つたらあかんのや。(はげしく)わいは線路向うのもんやけどな。釜ヶ崎いつのん載つてこの地面みたことないわ。

(救済ニュース NO.3) わしらの斗いに 煽動者は いれへん!

(71・6・15 朝日)

——警備本部は——十四日夜の群衆のあり方、つむじ風のような激しい動き方などからこれらの暴力団関係者が街頭トバクを追われた腹いせに騒ぎを扇動したこの見方を強めている。

RIGHT ON / CO
ME T OGETHER / F
りーくたりの台言葉 / きまぐ
れ図書館 / 放浪通信 / ぼくら
の仲間 / くり / 3A 歌集 / 幼
少年 / 日マ / SUNAGAW
A 日記

「無事件」一審判決下る

日特金策事件の公判は、
四年間にわたってすすめられ
てきたが、5月31日、判
決が下りました。

七被告いずれも懲役6年
7日（執行猶予二年）。

6月14日、検察側が控訴を被
告の弁護側へ提出したため、今後控
訴審で展開される。これま
で検察側が提出した証拠は、今後
検察側が提出することになり、今後
とも支那・協力を呼びかける
す。へ々反舌致す（りりり）

「無事件」一審判決下る

高橋富政社会科学研究所
アワジャール宣言 / 福の
中の抑圧 / 民衆の眼を / 不
正義事件について / 伝言板
XXXXX カットに抗議せよ /
平和とは？ 幸福とは？

「無事件」一審判決下る

「芸術家」への手紙 / お知
らせいろいろ / ロールオーバ
ーニューヴァース / キミエ
んへのてがみ / 革命的な中国語
講座 (1)

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

黒い血 / 結成宣言 / 私

の思い出 / 45年10・21社
集合攻撃報告 / りりり目
にしたアキマス / について

「無事件」一審判決下る

けりう戦線 (1) / 現任の
かの未来を / 鍛えよ / りり
ルコン / レックス / 竹園者
コン / レックス / 書評 / 革
命と裁判 / 初期マルクス
研究と現在の課題

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

同じように身に覚えのな
い強制収容をうけた人
、再度きかされて手固を
らめたいに、「この人は
O 派の者ではない」旨の証
明書を持たせて帰したとい
う。 (「救済」より)

「無事件」一審判決下る

富工通の国 / 戦争体験
をめぐって / サークル学習
会レポート / 天皇制批判 /
えきえき通信を出そう

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

ある。
ほくらは再びフリーで観
客とは何か、という問いを
発しなればならない。竹
庭の客もアンタラスノ
ッフを知らない新たな観客を
想定するには、ほくらの演
劇が既成劇団やアンタラを
超える作業を具体化してい
かなければならない。なぜなら
観客とは、表現者の素顔
のみに外ならないからだ。
ほくらの試みは、劉道昌
君との対話で中国から来た
青年の公演で始まった。そ
の日の観客は、ほくらの演
劇が決して政治的情宣の手
段ではなく、自立した演劇
運動のタイミズムを持ち
つつ、すぐれて政治的な課
題と直面していることを理
解したにすぎない。

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

「無事件」一審判決下る

「脱走」通信 / 改題
東京新聞と神奈川新聞の44年
PC5 発行 ジャパンセンター
一切の戦争機密を / ためし
北富士に原形を / アメリ
カの軍法会議 / 戦争犯罪の専
門家 / 米軍特殊部隊 / 海外反
軍情報 / 在日米軍基地の徹
底的研究 / 岩国の巻 / サイ
ミントン報告 / 定用G I
米語百科 / 横田あひる参
りの記

自由連合29号アンケート

④ このアンケートは〈姫路市みゆ山354 自由連合社〉へ返送して下さい。

- (i) 自重29号の内容について

- ② 下条君の連載「アーテンアソコ行状記」(P.6)についての感想・意見
- イ. もっと知りたい矣 ロ. 批判矣 ハ. とくに彼の心情主義について

- ③ その他の記事について おもしろかったもの P. ____ の ____
おもしろなかったもの P. ____ の ____

(ii) あらたには次号の自運を

1. 直接()送ってや 口. もういらん ハ. さんからもらうわ

二で買うもんね

(11) 新しい読者の紹介やってくれへん?

1. _____
2. _____

自連 アンケート 第2部

辟

- 707 -

- ④ あなたは「現代のアナキズム運動」(三一新書)を、(イ)読んだ (ロ)読んでない (ハ)読みたい

以上の出版物は自由連合社でも取り扱っている。購読を。

四群

- ⑤ あなたは共同体に (イ) 関心がある (ロ) 関心はない
- ⑥ <共同体>という言葉ですぐに頭に思い浮かぶことは何ですか (あなたの共同体観)

- ⑦ 共同体に社会の改革力があると思いますか (イ) ある (ロ) ない

その理由

- ⑧ あなたが共同体についてもっと知りたいこと

- ④長々ありびとうさんでした！ スペース不足の場合は別紙に書いてもらえそうです。

6036

姓名	陳美	金令	李
住所			